パワーユーザのためのLinux

マイクロソフトによるOS支配の下で，十分なパワーを発揮できないでいたソフトウェア開発者やシステム・インテグレータ，ハードウェア・メーカが息を吹き返そうとしている．Linux市場の拡大がその理由だ．UNIXに代わる真のオープンソースの世界で，優れたソフトウェア技術者が活躍できる舞台がまた整ってきた．Linuxはソフトウェア技術者をOSの呪縛から解き放そうとしている．一方で，ソフトウェア開発環境を巡って新たな競争が生まれようとしている．

（株）テラメディア　宍戸 周夫　norio_shishido@email.msn.com

○NTで大損したソフト会社

ある大手ソフトウェア会社が，数百万円であるシステム開発の仕事を請け負った．しかし，完成するまでにその10倍以上の金をつぎ込んでしまった．大赤字である．基盤OSとしてWindows NTを採用したのが最大の原因だ．

トラブルが起き，それはOSに起因するとしてマイクロソフトに問い合わせても何の回答もこない．どうも，米本社の技術者に問い合わせているらしい．しばらくして回答がきても，それは他のソフトウェアのせいだというばかり．自分でパッチを当てているうちにシステムは複雑になるばかりで，時間ばかりが経過し，人件費が膨れ上がっていった．そのソフトウェア会社は「NTを使ったため，大損した」と嘆いている．しかし，こうした話はこれまでもいくつか聞いている．

今，その会社が，NTへの反省を込めて新たなメインOSに採用したのがLinuxである．社内には幸いにしてUNIXの技術者が大勢いる．このパワーを新たなLinuxというプラットホームにそのまま振り向けられる．自社に十分な技術力があるなら，NTのようなブラックボックスOSより自由に手直しができるLinuxがいいに決まっている．UNIXも依然としてハードウェアの制約から抜け出せないでいるから，独立系ソフトウェア会社としてはLinuxの方が使いやすい．

OSを手直しするような技術力があるユーザはNTのような中身の分からないOSではなくて，ソースコードが公開されているLinuxを使った方がいいという考えが浸透してきた．Linuxは，特にパワーユーザにはまたとないOSということができる．これまで出来合いのOSの世界で十分な仕事をすることができなかった技術者に，Linuxは福音をもたらそうとしている．

○マイクロソフトに勝つ

マイクロソフトはOSをビジネスの糧にしている．マイクロソフトがそのOSの知的所有権を声高に主張し，値段をつけて販売するのはもちろん勝手だが，それ以外に選択肢がないという風潮が問題だった．

マイクロソフトのOSも，当然世界中から集まってくるきわめて優秀な技術者が開発したものである．しかし，インターネット上のLinux技術者の能力はそれを圧倒的に上回る．それはバグフィックスのスピードをみていても明らかだ．インターネット上で情報を探しだすのは多少困難が伴うにしても，Linuxによるシステム開発に有効な情報はあちらこちらにオープンな形で散らばっている．

Linuxのカーネルは，リーナス・トーバルズによるインターネットへの公開直後に何十万というユーザが世界中で同時に利用を始めたといわれている．そして，そのユーザはユーザであると同時に共同開発者にもなっていった．世界中で利用が始められたLinux上のソフトウェアにバグが見つかれば，すぐに修正が施され開発者のもとにフィードバックされる．また，新しいアイデア新たな機能追加や仕様変更のアドバイスなどが次々と開発者の元へ飛込んでくる．ネットワークで結ばれた，Linuxは何千何万人とい

う共同開発者と，何万何十万規模のベータテスターを抱えて開発を行っているのと同じだ．

これほど大規模のソフトウェア開発プロジェクトを動かすことができる企業は，数えるほどしかない．しかも巨額の投資を必要とする．しかし，インターネット上のユーザの結び付きが，そのような巨大プロジェクトをもしのぐような規模の開発を可能としている．マイクロソフトは強大なソフトハウスかもしれないが，世界中の技術者を相手にしたら勝ち目はない．

○ソフトウェア技術者の出番

Linuxのオープンソース方式は，従来のソフトウェア開発手法，そしてソフトウェア産業のビジネスモデルまでをも根本的に変えようとしている．厳密に仕様を決定し管理されたプロセスに基づいて開発を進める従来のソフトウェア開発手法に対し，オープンソースモデルはまったく異なる立場をとる．

ソフトウェアの作成過程にインターネット経由で多くの人々を参加させ，そこから良質のソフトウェアを生み出そうという考え方だ．こうしたインターネット上に埋もれている知識や情報を上手く活用できれば，良質のシステムを開発できる．能力のあるソフトウェア技術者は，その力を十分発揮できる仕組みが整っている．

ソースコードが公開されていること，そしてその改変が自由に行えることは，そのソフトウェアのユーザにとっては大きなメリットを生む．従来のソースコード非公開のOSでは，ソフトウェア利用者はプログラムにバグの修正，仕様上の変更，機能の追加などを行うことは不可能であった．そのソフトウェアを作成した会社に対して修正の要求などを出すことは可能でも，実際にその問題が解決されるまでに大きな時間がかかってしまう．だから，時間ばかりがかかって，コストがかさんでしまったのである．Linuxはその問題を払拭してくれる．

○Linuxによる囲い込み戦略

経済の原則から考えると，Linuxの登場によってマイクロソフトに集中していた富が，今度はOSの上位レイヤであるミドルウェアやアプリケーション開発者の方に回ってくる．さらには，その上位のサービスやサポート業者にも多くのビジネスチャンスが訪れる．そこで新たな競争原理が生まれる．

オープンソースOSの場合，そのソースコードには誰でも触れることができ，ソフトウェアの改良や修正ができる．技術力があれば誰でも良質のアプリケーションを開発できるが，その“技術力があれば”というところが問題となる．

Linuxの普及で立場が有利になるのは，まずコンピュータのパワーユーザである．それに続くのが，技術力のあるソフトウェア会社だ．OSベンダに集中していた富が，ソフトウェア会社やハードウェア・メーカの方へ移行してくる．このレイヤで，業界の再編が進む可能性はきわめて高い．

さらに，マイクロソフトとは別の新たな囲い込み戦略も生まれてくる．最近，ソフトウェアの部品化と流通を狙って「EJBコンポーネンツに関するコンソーシアム」という協議会が旗揚げした．Javaで記述された業務用ソフトウェアの部品化を行うEnterprise Java Beans（EJB）で，オープンなソフトウェア開発環境を作ろうという動きだ．

その基盤になっているのはLinuxである．Linuxの普及で自由な開発環境を目指すというわけだが，そこで中心的な役割を担っているのはIBMや富士通などの大手ハードウェア・メーカ，そしてNTTコミュニケーションウェア，日立ソフトウェアエンジニアリングといった大手ソフトウェア会社である．かつての名門たちが，マイクロソフトが主役を担っていたコンピューティングの舞台を自分たちに取り戻そうという動きといえる．

Linuxは，コンピュータ市場のパワーバランスを大きく崩し始めている．そこで，新たな競争が始まろうとしている．

Linuxを評価するとき，ビジネス用のアプリケーションが不整備であるとか，特にクライアント系のアプリケーションに問題がある，と主張する人がいる．特に管理用のソフトウェアはまだまだWindows向けのものが多く，Linux技術者であってもLinux端末の横にWindowsの端末を置いているというケースもみられる．

しかし，それはLinuxを正しく評価しているとは言い難い．ビジネス系のソフトウェアはしばらくはWindowsに任せておいていい．むしろ，Windowsができなかった分野をLinuxが担うと考えるべきだろう．そして，そこには新たな競争原理が働き，新たなビジネスチャンスも生まれてくる．少なくても，マイクロソフトのOS独占の時代に比べれば，ソフトウェア技術者の活躍する場が広がることは確かだ．

（平成12年9月23日受付）